

浪にたくふ鐘の音こそ哀れなれ

夕べさびしき志賀の山寺

詠ある志賀の山寺は此れなるか、さてもかゝるもの見むとて雨中疲れし身を一里あまりも迂回せし心にくさ心うれしく登りし山路も心しはれ下り大津をさして最急軍、道は簾中を通り眼界はるかなる原に出で數軒の家ある所に來れば道の左に小高き岡のあり。何心なく眼を向けしに、石柱に「志賀都跡」。

「嗚呼！」

と思はず叫びて事の意外に驚きぬ。犬も歩けば棒にあたるこの諺あれど簾から棒に出合ひては驚かざるを得ず。されどうれしかりき。思へば壽永の昔、淀の川尻より如法夜半の忍び駒、薩摩守忠度が詩人俊成に渡せし一卷の

さゝなみや志賀の都はあれにしを

むかしなからの山櫻哉

をはじめ凡そ文人墨客の詠にはいつれか荒廢を思はざる。あゝ恨み長し任申の亂。

いにしへの人にわれありや樂浪の

ふるき都をみればかなしき

さゝなみの國の御神のうらさひて

高市古人

荒たるみやこ見れば悲しも

高市黒人

あふみなる滋賀の花その里あれて

鶯ひとり春そわすれぬ(名寄)

さゝ波のあはれかけても思ひきや

滋賀の花その麦を見むとは

長流

「畑うちや昔は志賀の都人」とうち忍ばれ雨の中を練兵場に來りぬ、兵營「見！、大に賛成——」とは云へ我が發起に我が賛成早速番兵殿に言葉を掛ける暇もあらはこそ、「誰か面會人があるのか」「否」「向ふへ行き給へ」と指すは郵便箱の立ちてある所、命のまゝに去る。

「營所」見を願へませむか」

「あすこへ行つて下さい」門内の營兵の居る所を示す。門内に入る、實にや之れ、生れて今を初めの一步。二歩。三歩と進み入り學校よりの證明書を出す。

「暫く御待ち下さい」をりから營兵の交替。交替喇叭の音は響き渡る。ト、トタタテ、チテタタチ。將官の來る明治七年の暮れつ方、いとも畏き先帝の、御威光輝く聯隊旗を下し給ひしより此所に幾星霜。一度、西南の役の起るや明治十年如月寒き比叡嵐に旗影遙々筑紫に向ひしを初陣として、再度日清の役に出陣なし、廿八年四月半長門の浦を舟出して遼東半島に活動する事九ヶ月、凱旋して武裝の紐を解く間もあらばこそ、臺灣

島の土賊共龍車に向ふ蟻螂の斧を振ふと聞えしかば三度王師に従ひて匪徒集團を破り、越えて三十七年征露の戦の花咲くや、花咲く四月十有四日、四度出征の途に付きてより、五月、金州城に血を流し、南山高く、日の丸の國旗を立てし苦闘には、彈丸の一破片に旗頭を損し、六月、得利寺、蓋平、大石橋、海城、遼陽の諸戦闘に加り沙河に戦ひ翌年三月奉天附近の戦ひに猛烈の夜襲をなし、度重なる出陣に立てし名譽は豊阪登る日の御旗の譽と共に琵琶の潮はかほとも比叡の峯は崩るとても永世不朽に香はむなり。

やがて程經て「許す」の言を得て、一少佐の命令は上等兵に下り、未來の國家の干城を案内せよと云ふ。我は親切なる上等兵に従ひ隅々まで見學せしもかねて先輩のしはし誌上に報じたるまゝ此所には語るを省く。兵營を出でしは七景を霞に込めて三井鐘のゆるやかに響き渡る頃。幸ひ雨は降りやみしかば、いで栗津ヶ晴嵐をさ長き狭き大津の町を走る。近江新報社に立寄りしのみにて縣廳すら横目に掛けしのみ。濱通りに沿ひて思ひがけなく義仲寺を見出しぬ。あはれ小庵なり、心して通るにあらざれば見のがすべし、はしなく我のたづぬるにいたりたるは亦ふしぎの縁のありだるにや。古人も我より先に此寺に詣で、

大木曾の荒山櫻末終に

雪と散り行く栗津の原

の一歌をたむけなむ。限りあれば吹かねど花は散るものとかねて覺悟は白旗を木曾の山風に翻してより奇計功を奏して礪波山に平家の大軍を破り、快刀乱麻を絶ちて都に驕る、平家を西に蹴落し時の天下を驚倒せしむる大活劇を演じたる旭將軍の榮華の夢も、栗津の晴嵐に名残りを止む、あはれ催す夕ぐれに古を懷へば英雄の恨み今さら深きに、木曾殿と背中合せに寒さを忍ぶ芭蕉塚に俳祖のあはれ世のなき跡弔へば蛙飛び込む古池の水の音も忍ばれてそゝろの感に堪へさりき。あゝ一世の英雄一流の詩人一ツの庭に。影二つ枕ならべて共に千年の眠りを結び行人をして轉た懷古の情に堪へざらしむ。

老僧に謝して歸らむとすれば誰そ彼れ時とてすでに門の扉は銷づ、即ち小門をくぐりて外に出づれば電燈の影燦爛たり、幸ひ雨はあがりて夕陽照り空や紅いで栗津晴嵐を味はむと濱通りをいそぎけり。

町をはづれ隙に出でし頃すでに日は暮れ夜になりて時計を見れば八時なり。栗津の夕焼の美も何のその、空には、宵月の影かたむきて人足薄く松風物凄し、並木は絶えて新道にうつる所に石柱ありて今井が墓の方へ三町を示す。かつて小野君と弔ひしは有明の月の山の端に入らむとする秋の夜の曉、今は氣も弓張の影薄き春の夜、あたり暗ければ懷中電燈に行手を照し、小川に沿ひて畦畔をつたひ、勇士兼平が奥津城にたどり來ぬ

淡き電光に墓を照せば、昨日に變るけふの様、我小學校時代に師に供して之を弔ひし時は、深草乱抽、年々荒蕪する有様なりしを、その後たづる人ありて塙垣さへ造られ杉浦重剛氏の碑文さへありて壽永の昔を語り枯骨はために光をはなち、天下の義氣を振はしむ。四面寂然と靜にて雲間がくれの利鎌の月にふく訪ふは嵐か松風の一陣毎に鬼神飛舞せるかと疑はるをりからに

「ふしぎやな、粟津の原の草枕に甲冑を帶し見給ふはいかなる人にてましますぞ。」「おろかと尋ね給ふものかな御身これまで來り給ふも我が亡き跡をどはむ爲の御志にてましますや兼平これまで参りたり」
 「今井の四郎兼平は、今は此世に亡き人なり。(中略)」さて其後思はずも。敵の方に聲立て、「木曾殿討たれ給ひぬ」と呼ははる聲を聞きしより。「今は何をか期すへき」と思ひ定めて兼平は「これぞ最期の廣言と」
 「鎧踏んばり」大音上げ木曾殿の御内に今井の四郎「兼平と名のりかけて、大勢に割つて入らば、もとより一騎當千の、秘術を現じ大勢を、粟津の汀に追ひ詰めて、磯打波のまくり斬、蜘蛛十文字に撃ち破り驅け通つて、其後自害の手本よとて、太刀衝へつゝさかさまに落ちてつらぬかれ失せにけり。兼平が最後のしぎ、目を驚かすありさまなり、目を驚かすありさま。」

と謠曲の言の葉忍へば「日本一の剛の者、主の御供に自害する見習へや關八ヶ國の殿原と」大刀ふりかざす姿は目に浮び箴に残る八筋の矢にて八騎射落す鎧然たる鎧の音も聞ゆるに粟津の原の夕風に昔の夢さむれば石山驛を出づる汽笛一聲更け沈む闇をつんざく。春雨にうるはし征衣に身重く、疲れし足重く再び道に返り暗を歩む一町、孔燈を點して來る自轉車に合ふ、突然止まる、さては誠かと思ひしはつかの間「君か？」の一言を發する時、その人の四郎にあらで我友植村君なるを知る、前日一報せしまゝけふ來るを期しあまりの遅きをさかひてわざ／＼迎へに來りたりと、實にありがたし持つべきものは友人なるかな。共に歸らむは心なれど家にも告げむ必要あればと我荷をこゝ／＼持ち「また迎へに來ます」の一語を残して去る、一瞬す

れば最早や暗にまぎれて姿なし。身は輕し、心は安し、暗の松嶽を大音張り上げ獨り嘯く

軍門命賤燭抽忠

時運空衰失戰功

日暮孤墳春寂寞

年年荒草偃英雄

友の家なる鳥居川に付けば柱の時計は九時半を告ぐ、胸襟を開いての友が給侍に、旅行談をしつゝ箸を運べは十時を過ぎぬ、入浴して床に入り枕ならべて話は續くれば十一時を報す。「オイ、モウ眠らう」。「モウ寝よう」。

其七日

「辨當をして下さる間に、一寸石山へ参つて來るわ」

「今すぐ出來るのだが急ぐならそうして呉れ給へ」

「けふは是非とも歸りたいと思ふてゐるから無駄に時間を費しても、いらむ事、とりあへず参つて來て歸りにもらひます」

「そうならそうして呉れ給へ、そこに草鞋を買て置いたから……………」

「ヤゝ有りがたう。載きます」

「君は草鞋を載くのか、普通の人にはくものだがハハ……………未だ、上げてないのだ、君もすぐ給へ僕も上げる」
 「僕が上げる。それとも氣の毒と思ふたら君一人ですげて呉れ給へ」

「なせ」

「なせて、昔から、わらざりは二人してすげないものと聞いて居る」

「ホホ、そむな定理があつたのか、ソレなら僕が上げて上げよう」

「濟まむ、命長けりや亦々恩返しをする時もあらう……！」

「あてにせむと待つて居らう」と手を動すを僕は見て「オイ／＼君、何をするのや、そんなすげやうしたらはけせむが僕にかせ／＼、知らないなら知らないで初めから云へばよいに」

「知らざれば知らずとせよ之れ知らざるなりかハ……失敬々々」

胸襟を開く親友の仲やがて身じたく調ひしかば

「君も来るか」

「行かう」

共に立出むとする時寝巻姿のまゝ飛出したるは弟の君なる久公

「僕も行きたい」

「オ前は何かや、ソナナ姿して」

「兄さん行くなら僕も行きたい」

兄の言葉も家人の慰めもいつかな聞くべくもなくしてその顔には測候場の早くも雨旗を上げたり雨は平行四

邊形。「僕一人で参いつてくるは」と家を辞し、野路を進み川邊に出れば、瀬田の川霧たる／＼にあらはれ渡る朝日影美はしく今日は天氣は好しと心地晴る。仁王門を通りて寺院内に入れば道の兩側に並び植わられし躑躅の緑、花は紅か白か將た黄か、紫氏揮毫記源氏の間や、南無觀音堂に参らばやと佛意を刻まれし手洗鉢に洗手洗口して身を清め、石段を登り／＼てつひに石山の庭にさまよひ入りぬ、古より天下に響く幽境の法の庭いつかたよりかチリンチリンと順禮の歌の聞ゆなり、音をたよりて歩めば、彼の齊藤氏の「事ヲ好ム天仙鐵鎧ヲ奮ヒ、琢ギ成ス岩石萬狀ノ奇。黒龍騰驤白虎伏ス」と稱へし巖は今尚綠色したゝらむばかりに屹立し「傳ヘラク是レ源語成章ノ所、風流千載ニ紫姬ヲ稱フ、芳蹤寄在名勝地、地靈人秀相宣キヲ得。一笑當時詞林ノ傑、甘ジテ女郎ニ向ヒ降旗ヲ立ツ」と云ひし堂宇には今尚「紫式部源氏間」と麗々しくも書きも書きたり此間より左して御佛の御堂に入ればはの暗き内に、佛に向ひて回向するなる順禮あり、その詠歌と共に我も身の幸を祈りてしばし順禮の身の上を思ひぬ。

後の世を願ふ心はかろくとも

佛のちかひ重き石山

南無や大悲の觀世音、重重重罪、五逆消滅、自他平等、回向を高くつゝるなり、欣求淨土の念なき身も同じ

旅の身かと思へは、何とはなしにゆかしの感のせまるなり。

本堂を後に一切經藏大日堂を眺めつゝ月見堂に來りて眼をはるか湖上にはなてはその快感筆端の及ぶべくもあらず「上ニ香閣ノ高ク縹渺タル有り、下ニ大湖之碧波有り。畫圖ニ夙ニ湖山ノ景ヲ識ル、今日相訪テ相疑ハズ」拙室の詠亦面白し。今は昔紫の式部は、澄み渡りたる月をながめ須磨、明石の月を思ひて、須磨明石なる二卷を物せしとかや、ために残る源氏の間。我今その間より高き此の一角に立ちて、如何に丈を高くするとも月海上に浮ぶの絶景を味はむは難きに、黒髪こそは長くとも身長我よりは短き式部などで「間」より湖心に影る美に接し得む。「源氏の間」に付きては世に定説あり。如何に縣を愛することも臆説は臆説なり。

石山やにはてる月のさやけさは

唐土までも曇りなからむ

古の詩人も此絶景の月を見てはかゝる痛快の詠も出づる也。岩間を曲下りて鐘樓堂に鍾を四つ鳴らして下山す

「只今」

「ヤー、お歸り、べら棒に長かつたナー」

「随分時間がかつた、失敬々々、モウすぐ歸へらしてもらふは」

「急ぐのなら仕方がないナ、僕も健部さんまで御供する、辨當は此所にあるぞ」

「有がたう」門まで送り呉れたる家人に暇を告げ「久ちゃん失敬」と二人して立ち出でぬ。

「けふは上天氣だナ、旅出してから六日も六ナ日ではなかつた、昨日は終日雨の降り通し、雨やら寒いやら、海津の方では雪が降つて弱つた。よつほど精進が悪かつたが、けふといふけふは、お蔭で氣晴れぬまゝぬれた服も汗くは「早い橋まで來たナー、オイ君」

「何ぢやい」

「一寸之を持つてくれ……………之も……………之れも」

「一体何をやらかすのヤ、便所でも行きたいのか」

「アホナ、我輩は之より此の橋を倒立にて渡らむと欲するのだ。ナーニ一度で渡らいでも、倒れた所から亦始めたらよいぢやないか」

「やつて見給へ僕が數へて居よう」

「よしや、ワン、ツー、スリー」

「オイ、うまいぞ、ソラソラ……………ソラ／＼倒れた、ハイ一べんの失敗」

「これは君登りだからや、困難に屬するワイ」

「登りに七へん失敗したナ、下りは四へんか三べんか」

「三へんだナ……………、オイ倒立ちと出られますドン／＼」

「やはりわらひ、二へんだつた。登り七へん下り二へん合して九へん」

「ッナニ大聲で輕蔑するない、君！天下廣しと雖古今遠しと雖ダネ、瀬田の唐橋を倒立で渡つたのは恐らく小生獨りだらう」

「そうだね、あまり聞かむネ此の橋も渡つたらどうだ」

「これは……」渡れないどの弱點を現すを好まずとは云ふものゝ、心中大橋を渡るは如何に。つらきなり。

「此所で秀郷が百足を退治たのぢやないか」話を外に流せば「ありや、餘程名高いネー秀郷の社もあそこにある」と乗り出した様子、

「あむな話は實際だらうか」顔に注目する時すでに二間を渡る「無論」と出た「無論作り話しに違ひなからうが、秀郷が栗田に居たのは眞實だから、百足は山賤等を形どつたのかも知らん、つまり三上山を根據地とし、七卷き半はその勢力を示し、亦片相手を龍王としたはあまりめづらしくも無い事で琵琶湖には龍が住むものとなつてあるからナー竹生島の謡曲にも出て来るだらう」橋はわたりて瀬田町なれば好むで話を聞くにあらざるも之れ一種の義理と心棒す。

「表や鐘や呉服、釜にはまた／＼意味のある事で……」誰に聞きしか、何に讀みしか、何時如何にして研究せしか語る、説く、申す、いつとはなしに大鳥居もくゞりて健部神社の廣前に來りぬ。

「オイ君、健部さんテ之が官幣大社か、滋賀縣の大社三ツの内、之が一番下るチー」

「三ッ！大社が日吉さんの外に何がある」

「恐れ多くも我お多賀さんは明日が大社の昇格祭で」

「ソウ／＼タベ君が、そんな事云うて居たチ新聞にも出て居た君が歸りを急ぐもそこにあるのか」

「然り。今日はどうしても歸る。構は日吉が一等だゾ然し繁昌は多賀が一等かな」

「そらそうだらう。兎に角參拜せう」

身の健全、文運の發達を祈りて社務所に緣起を乞ひ、元に歸りて東海道、友は家に我も家に心ざして此所に別れを告ぐ。春光いよ／＼のどかに鳴く雲雀勇む膝栗毛の駒もどろどろと蹣々ならす、瀬田の長橋うち渡り、行き交ふ人に近江路や、世のうねの野に鳴く田鶴も子と思ふかとおはれに旅せしは。昔さる殿上人の東下り我は意氣は盛に、鐵脚を運び、一里有余も歩む内道の左に一坪に仕々どすむ溜池あり、糸の如き畦畔にて稻植うる田と境ひし、池の中央には一小石ありて雜草繁茂す、對岸に「玉川」とある櫻石に「野路の玉川」のあはれの面影なるを知る。玉川と聞けば、昔なつかしき萩の名所、あまた詩人のたづぬるありて

あすもこむ野路の玉川萩こねて

色ある波に月やとりけり

千載集に見えし俊賴の詠歌はその標石に刻まれてかすかに讀むを得、

さを鹿のしからむ萩に秋見ねて

月も色ある野路の玉川

四六
仲光

月郷雲客に愛せられし昔の玉川も、今は心なき者は小便も注ぎかねまじきあはれの様にして玉川と顧る旅人なきも道理なり。野路は、今老上村に屬する字の名にて治承、健久の昔は驛舎の土地と聞く、一度荒廢するや旅人しばしば盗難に逢ふほどの松原と化し、近年に至りて開かれ今はすでに後方も無く道傍に立てる松一本は

打わたる瀬田の長橋はともなく

一むら見ゆる野路の松原

夫木の一歌を思ふのよすがにて流石西行も山家集にかくは残しぬ

近江路や野路の旅人いそかなむ

野州が原とて遠からぬかは

かたはらの菓子賣る店の主に何くれとなくたづねれば煙草を喫しつゝ、「昔志賀の都があつた時、正月の糴をたく水を此所より二里ばかり奥の山陰に汲みに行くのが例であつた。ある年その使が此所まで來り、あまり水の清きためそれを汲み取つて歸つた、ところがその水ではどうしても小豆が煮れない、かつそれを食つたら腹痛を催したそこで左様な毒水はとて取り去る様に命が下つた、然しあまり清水なので流石が惜みて歌讀みして水の出るのを封じた、歌は石に書いてあるのがそれで真中の石はその時に置かれたのである」「あす

もこむ」の歌我その意味を解し難し、主の話亦信じがたし「まん中の石にさはると腹が痛むとて草刈りする人もなければかくはすたれ行くのである、此度モット大きな石を建て、名所である事を世の中に知るやうにする事になつて居る」。

野路を後に程なく草津の町を迎ふ、東海道中仙道の追分の宿、膝栗毛盛なりし昔の事共

今宵かはる草津の里の旅枕

むすひもなれぬつゆそいふせき

爲村

彌次や喜多八の失敗、姥が餅、町の盛なども見學旅行なれば聞き眺めつゝ早や踏切越えてまたすぐに守山の村「望月」なる敵討ちの謡曲あるを聞けどくはしき事は

白露も時雨もいたく守山に

下葉峠残らず色附きにけり

貫之の歌くりかへしつゝ

はるかなる三上の嶽を目にかけて

いくせわたりぬ野州のかは波

はかつて彌次郎兵衛、喜多八に暨の川渡をして首までの深き流れと見あやまりの恥を握らしめし事のあるを今は水なく、彌次に代る友もなければ、橋の上に腰下し靴、外套を欄杆に掛け、名に近江富士を眺めつゝ聲

飯を頼張りぬ。

わきもこに又も相海の安澤も

安寝もねずにこひわたるかも

(萬葉集)

相海は近江、安河は野州河、縣下第一の大川、渡れば之野州の町。中仙道を捨て、朝鮮人街道に従ふ、大体野州郡は奇体極る土地、道より高くして通行する頭上を流る川は數あり。されど道より低く流れ行く川もあり、今我は美はしき傳説ある祇王川に沿ひ、ついに渡りて村に入り川底を通りて一村に入り、街道をすて、七八町中北村に入りて祇王寺を訪ねけり、此村は平家物語、盛衰記に舞女の譽世に高く平清盛の寵遇をうけひなかりし美女祇玉祇女の姉妹の孤々の聲を上げし所とす、寺はさのみ壯嚴にはあらねど幽玄なる庵なり、庵主は尼僧にして禪宗なり。庵主は奥間に導き厨子を開けば身には黒染の衣着て尼の姿なる像四つ、庵主は南無阿彌陀佛と念じつゝ、祇王、祇女、母刀自佛御前とねむごろに教へぬ。今に馬賊の隊長となり世界を舞台に雄大なる活動をせむとする堂々たる彦中熱血男兒のわずか片々たる白拍子などをいかで拜するものかは、とは云へ虚榮に満つる若き女にしてその身の望は村民を助くるために祇王川を作るの外になかりし美德なる婦人とも思へいかがはせんと思ふもしばし、庵主の手前無意識に兩手合してぬかづきぬ。

萌つるもかる、も同じ野邊の草

いつかは秋にあはて有るへき

その大和言の葉と共に女の鏡とて女子の押繪となし氏神の繪間に奉納するにても行きて返らぬ祇王川の流れの空しからざるを知る。

「祇王さんたちの御墓は京都の嵯峨にあります、御霊を得て參つた墓は之れであります」寺の庭の隅には石碕ありて物あはれ、かつまた彼方を指ざし、

「祇王さんのお生なすつたあどは、あすこらにあります、今は竹藪となつてゐます」と語りぬ。

「こちらへ入つて御茶なつと御上り下さい」

彼等が父は江部莊司橋時長と名乗りて近衛の帝に仕へ奉りし北面の武士、亦母は刀自とて夫の保元の亂に戦死するや此地に來りて二女の養育に余生を送りて京に出で親子共に白拍子となりけるが、母の病氣を快愈せむものと日々石清水神社に祈る姿を平清盛の見て、愛で親子三人を西八條宮に召す、之れ今に世の人の話となる源なり。庵ある中北村を去りて北村に北村季吟の後問へど彼が先祖の墓の荒草中に立つのみにして何の忍ふに足るべき物とてはなし、某寺に行きて尋ねれば前村長なる後藤氏を訪へよと云ふ氏を薦めれば醫師木村氏を訪へと云ふ氏を訪ねれば、小學校長の深く研究したれば氏を訪へと云ふ。「何んだ馬鹿々々しい」元より季吟に付きては知る所なれば只だ彼と村との關係を知らむと欲するなり。結極彼と村とは關係なし、彼は此の村より出で此の村は彼を出す、屋敷後も諸説ありて後孫に代右衛門と云へる人ありとか、代右衛門氏の家内の人の自ら語る所たり。

再び中仙道に出で一里半、八幡町に入り三十町安土に着す。幾度か來たり遊びし安土の城墟も曠世の英雄を弔ふべく足引きの山路に登る、仁王門は破れて兵共の夢の後、三重の寶塔亦昔の風情なく、山上の墳墓は嚴くとも殺風景にして古壘雲蒸雨氣腥の感慨や深し、あはれ國亡びて山川草木轉荒涼、平素信長の行狀を慕ひ人生五十年に滿ちずして霸蹤、本能寺の煙と消えしを惜み願望低回去りかねて、

安土墟高雲裡攀

霸蹤化作老禪關

晚霞如火人回首

一點青螺認叡山

古狂生賴三樹三郎の此所に登りて彼を想ひ賦せし唐歌を歌へば青春の熱血は湧き返り堂々たる英雄主義を叫ぶなり。痛快淋漓の詩人、快刀乱麻の英雄共にその性狀類似しその非業の最後まで類似せし奇縁よ衰縁よ老禪關總見寺に至る頃すでに夕まぐれ、幸ひ余白を許せ服部南部が安土懷古の詩を吟せむ

構ヲ遺ズ山上ノ寺

寶閣ハ蒼穹ニ倚ル

草木年月古クシテ

往事ノ慷慨空シ

昔ヲ噫フ全盛ノ日

經營一ニ何タル工ゾ

城池ハ江水ヲ祈リ

樓台秦宮ニ比スベシ

割據猶未ダ已ズ

征馬西東ニ驅ル

豈身上ノ憂ヲ知ラン

下ヨリ起ル肅牆中

篡逆人ノ嫉ム所

三日聊カ雄ヲ稱ブ

蒼天自不言

手ヲ彼豊公ニ假ル

悠々二百歳

電過夢ト同ジ

孤冢雲慘憺

荒壘艸青葱

香火長吊昔

梵唄日暮風

かねて勝手知たる總見寺山(安土山)細道分けて街道下り急げば早し能登川に着す。此の時松風寒く日は暮れはて、空には利鎌の月の影薄く、けふは故里に歸らむと決心堅く石山を出でしもあはれ此所能登川に日は暮れ道さらに遠し。幸ひ叔母のあればたづねむとは思へども待てしはし、我此の度の旅行に夜行の舉はかつて無し、されば旅行談に花を咲すべくいでや之より松街道の夜行を試むと迷ふ方なき大道を、「四百余州を擧る十萬余騎の敵。國難此所に見る。弘安四年夏の頃。」疲れを軍歌に慰めて愛知の川風身にしてみても「荒神山月清し」を歌ふ時十時は過ぎぬ四面うばたまの木曾川渡りて川瀬近き清崎に來れり、日數重ねし旅の末石山より歩みての疲れに、夜中語るべき友なきと清崎に親類のあるあり、多賀までは尙二里ありて歸宅は十二時を過ぐべしと、つひに夜行は二里を行ひしみにて初の決心何方へか去り畢んぬ。

その終り

翌朝顔を洗ひて東天を眺むれば、なつかしの故郷の山影、朝日影、麗かに杉坂山上の曉雲はけふ大社に昇格

の多賀の御森に下り来る瑞雲かと早く歸らむ心地すれど、今一度琵琶湖を眺めて過ぎ來し旅の思ひ出に八日の草枕の名残を告げむ。然り然りと山路登る十有八町、荒神山上に勇姿を現し、「嗚呼」と、一聲神氣凛然。一碧萬頃長煙一空に欄引きて伊吹の峯は雲表に聳む比良比叡は模糊の中にあり。かゝる天地を七寸の草鞋に踏破せしかと思へば萬斛の溜飲の一時に下るの痛快の感に堪へざるなり。愉快！愉快！颯々と吹來る天風に埋骨何期墳墓地、人間所到有青山、と長嘯しつゝ我先輩藤田五十若君の快舉を慕ふ。君故國の山河を蹂躪するに年有り、さらに支那を経て悠々南洋の天地に向ふ。近時音信の絶えて久しく、つひに死せし乎の説は立ちぬ。あはれ君がかつてその覺悟を言ひし如く杖は卒塔婆となりしか。我は元、父母が末期の水を汲まざるべからざるの身、君が後つぎて外國を墳墓之地とするは難きに在りと雖、今に見よ見よ、來む八月我中學時代の名残りに東海道を突破する上からは、將來如何なる置位に立つて、千島の極み臺灣の南端、苟も我皇土に我草鞋の跡をぞ止めむ、日本アルプス阿蘇山脈何する者ぞ、雪の樺太、雨の沖繩熱の新高、いつかは鯨住むや海灘を船出して、猛虎嘯く難林八道、萬里の長城を飛越えて戈壁の砂漠に月や仰がむ。嗚呼我將來旅行家となる起點を峻秀千古我大八洲の花たる蕩々三万六千頃に亘る名湖琵琶一周に出したるは、實に欣喜に堪へざるなり。

さらに名残りを見下せば、水天の間に懸る白帆の一つ、二つ、三屋に一步早く歸りし足田君は如何にしてあるならむ。四つ、五つ、六つ、七本槍の山麓なる小野君や、今如何に我等三人螢あつめて同じ窓になづみ亦さらに共に遊びし琵琶湖一周膝栗毛よし濱の眞砂は盡るとも互の一生涯の歴史中學時代の傳として花々しき色彩を放ちて萬世不朽に残るらむ。

足田君よ進め！小野君や勵め！我亦勉めむ！

天晴業なりて後、三人相集るの時、ありし昔の語り草とやせむ。(畢)

(この文前々號に掲載すべき處紙數の都合により本號に回はしたり)

亡友長谷川君の柩

四 甲 久 米 健 次

端艇部の選手で、快活で、沈着で、昨日まで全校の花と歌はれた友が、今は早や此の有様。荒繩で縛つた粗末な柩に納れられ、鬚だらけな百姓男に擔がれて、今しも里の墓地に行くのである、何と云ふ果敢ない事であらう！。

一昨日 我が友長谷川君が心臓麻痺で倒れた日——此の日こそは僕にとつては生涯忘るる事の出來ぬ悲しい恨めしい日なのだ。丁度その日の午后一時過ぐる頃であつた。此の悲報——長谷川君が死んだと云ふ此の生涯忘れられぬ悲報——を得た僕は宛も胸をむぐられる思をして、急ぎ彼の家へ駆け付けた。町通りにない、奥の家の午后は、座中の人々の顔がはつきりと見分けられぬ程薄暗く、只骸の前に立てられた蠟

燭の赤い焰と、數十本の線香の高く低く示せる赤い色の點とがそれから立ち昇る細い煙に、濃んだ狭い室内に、ぼんやりと見ゆるのみであつた。

「どうぞ一度見てやつて下さい、こんなものに……と遺族の人に云はれて、ばねではちかれた様に立ち上つて見れば、……たとへ腫の光は失せて居つても、唇の紅は褪せて居つても、一文字に結んだその口、豊かなその頬、秀でたその眉、これが器能の永久に休止した人とは、……僕には思ふ事が出来なかつた。

君、君、……僕は聲を限りに呼んで見たかつた。未だ暖かつた屍を抱いて、唯一言でも慰めてやりたかつた。然し、もう駄目だつた。友は石の様に、木像の様に堅くなつたきり動かない。噫々やつぱり千秋萬古、遂に友を見ることが出来なくなつたのであらうか

思ひかへせば四年の間、同じ學びの道にいそしんで、共に雨につけ、風につけ、よく身をいどうて、未來は遠いぞ、勵まうぞと誓うたに、一朝脚氣の襲ふところとなり、歩行も思ふに任せぬ身となつたが、友が衛生思想の深かりし爲めか、病魔も日を追うて減退し、遂に愁眉を解きて寧日を待つ様になつた。所が氣節冬寒に向ふと共に、病勢又逆轉して、再び藥餌の人となつた。然れども、就學の身の療養も思ふ様ならず、加之第二學期の試験期も迫り來つた。不自由な足を一步には休み、二歩には息ひ、勤勉なる友はどこ迄も學事を忘れなかつた、此のけなげな友の決心に試験も無事に卒へて、將に家路につかんとすれば、重き足は昨日に十倍して動かんとするに運びやらず、我が肩に助けられつゝ漸く彼が家に歸つた。叔母夫婦に補けられて

床についたが、積日の疲労と事了りたるに氣のゆるんだ友は、五體綿の如く、よもすがら發熱發汗しきりに病勢頓に革つて來た。

明くれば十九日。これぞ友が最後の日である。神ならぬ身の已が命數の旦夕に迫れることの知る由もなく叔母なる人と互に暖かき言葉を交はせし程だつたが、十二時近くなつて一度起しくれよと膝に抱かれたりしが

「噫々苦しい」

と、一言を限りに、遂に瞑目してしまつた。狂氣の如き叔母の

「彌一やい……」

この叫びに答ふるものは哀れにも松吹く木枯の音のみであつた。紅なす頬は次第／＼に青ざめて、暖かかりし肌は醒めて冷くなつてしまつた。斯くの如くにして、我が友長谷川君は逝きて歸らぬ身となつた。

噫々友は二九の花の蕾のまゝで胸に滿つ大抱負を花萼に包んで嵐に散つてしまつた。さらだに心交の友は少ないのに、今や此の友を失ふ、末の露、もとの雪、後れ先だつはせんすべなき世のためしとは聞いて居つたが、それでも未來の暗くおぼつかないのに泣かなくてはをられなかつた。泣く／＼も、香華を手向けて心ばかりの回向をし、生れて始めて手を合した時には、鬼の如き僕とても、流石に泣かずにはをられなかつた。流石に無常を感ぜずにはをられなかつた。潮の如く迫り來る萬感に我知らず友の骸に飛び絶り暫し男泣きに

泣いた。

列は悲しみの内にしづ／＼と小高き推が木の晝尙ほ小暗き迄茂つた墓地に來た。柩は下された。屍は今や茶毘一片の紫雲と化すのである、折からうら悲しき讀經の聲は今日のみは殊に氣高く見ゆる僧侶の口より漏れた。念佛の聲が一しきり起る。聽て、焼香の香が回つて來た。喪心した様な僕は荒蕪の上に額づいた。色々な感へが友の上に浮んで來る、

「オ……君は果して死んでゐるのであらうか？、もしもさうだつたら夢や晝に見て居つた如來の來迎もあらうし、又、經文の中の極樂にも行けるであらうが！。然し一時氣絶しただけぢやなからうか？……」

「おい君、死んでゐるのぢやなからう、おい」

と、云はうとしたが噫々聲が出ない。曇る眼に打ち見やれば、風もなきに燈火ほのゆれ、立ち昇る線香の煙も五彩の雲の様で、眞言臨終の姿して、亡き友の乗込める様な心地がした。熊が住むてふ蝦夷が島のたらちねのみ親の歎きを察すれば此の胸もはり裂ける様で、熱い涙が頬を傳うて、ぼろ／＼とこぼれた。僕は堪へきれなくなつて、顫ふ手に友の後生を祈つて脇に出た。そして偏への墓場の方を向いて思ふ様泣いた。涙は後から／＼止め度もなく流れて來た。

友の眠るべき墳上の草は春風と共に崩れ、秋風と共に萎むであらう、然し、友の思出は長へに彦陽健男兒の胸に溫存せられるのであらう！！。

あたりは白皚々として、山茶花は力なげに散り、鈍色の雲は重たく壓いつける様に低く垂れて何となく泣き度くなる夜の寂寞を破る山寺の鐘の響きに耳を欽つれば寂滅爲樂と響き渡つる。噫！！。(終)

宗教改革とエスパータ

四甲 小川 桂 瑞

歐洲近古史に於ける宗教改革と聞けば予等の歴史時間に學修してより猶耳新しいのである。

西歴第十六世に起りしこの宗教改革論は端なくも歐洲の宗教及び政治の兩界に激變を及ぼせし一大運動にして、嚴密に之を論ずれば、正に之れ一の大革明に外ならざるなり。この運動や始め獨逸の一角より起りしも餘勢列國に波及し、竟には全歐的三十年戦争てふ一大爭亂を起せし結果、列國新舊二教に分る。要するにこの宗教的爭亂は歐洲在來の文明を摧破せしものにして、論者或は之を慨き、若しこの爭亂なかりせば現代歐洲の文化は尙ほ迥に優れるものあらむと、然りと雖もこの論や畢竟空想觀察に過ぎざるを思ふ、抑も爾來十九世紀に至るまで獨逸國勢の疲弊は三十年戦役の打撃に基くと雖も、他方面より之を見るときはこの爭亂により思想の自由と黨派の競争とを産み出せしは他日帝國大發展を得たる酵母なりしなり。現代歐洲に於ける列強は皆この爭亂の爲めに苦楚を嘗めしものにして、かの伊太利及び西班牙の如き國力振はざるものは比較的この爭亂の餘波の微弱たりし爲のみ、又之を正教の方面より見るも、この運動は正教の爲には一大刺戟

劑たりしなり。教會は之が爲めに覺醒して内部の組織を改良し其面目を刷新せり、もしこの爭乱なかりせば教會は己が非を悟らず腐敗又腐敗竟には自滅を免れざりしならん。予は信するなり。抑も宗教改革の説は既に十四世紀に於て、英國にウイクリフ、ボヘミヤにフスありて盛に之を唱導せしも當時の人智は未だ幼稚にして宗教改革の眞意を解せざりしが爲に其効を奏せざりしと雖も、かれルーテルは十六世紀の初期、文化は進みて古學復古し加ふるに大陸發見、世界周行等のことありて世人の思想擴大し、且つ印刷術の發明ありて新説を四方に傳播するあり、殊に人道學者が希臘ヘブライの古典を研究して羅馬教會の教義の誤謬を指摘したり、如此諸般の準備に完備せし時代に現れたるルーテルはこの好機に乗じて自信を鼓吹せしがために其の所説効を奏する事を得たりしなり。天下の大勢如上なるに際し法王シキストス四世及び亞歷山大六世の如きは徒に自家の權勢と貨殖とをこれ事とし、これが爲には所有蠻行をも敢て辞せず、次で法王ユリウス二世及びレオ十世の如きは傲奢放逸其の極に達し、教會は殆ど破産に傾き人心漸く教會を離るゝに至れり。

此の時に際し、かれマルチン、ルーテル夙に志せる法學を廢め、アウグスチン敎社に入るや羅馬視察を命ぜられ往く羅馬教會の腐敗は豫想せしに勝れる事を目撃し浩歎悲憤、當時教會の形式的善行勸化の非なるを諷り、救済は須く信仰の徹底に由らざるべからざるを痛論せり。當時偶々法王レオ十世聖ペテロ會堂建立の爲に免罪符を公賣せり、この公賣たるや只に建立のみならず、自ら好んで華美豪奢を事とせしを以てなり、即ち宗教改革の導火線となりし是なり。抑も免罪符の原意は罰金を支拂て刑を免るゝと云ふにあり、然してこ

の要旨とする所は苟くもクリスチャンたる良心を具ふるものは皆不法不道理なるを認めざるはなかるべし。夫れ罪の赦を得るには其衷心より懺悔し、且潔罪の儀式を受くべき必要あるは勿論なり、是等の順序を守れば永遠の刑罰を免れて地獄に墮つべき患なし、されど單にこの事を以て満足するを得ず。現世に於ける滅罪の爲及教會の鴻恩に酬めんが爲に更に盡す所なかるべからず。若し其の義務を欠く時は死後煉獄に於ける苦痛必ずや大なるべし。此故に煉獄の苦を免れんと思ふ者は免罪符を購うて聖堂建立の偉業を援けざるべからず。又死者の爲めに該符を購ふ時は其の靈魂は直ちに煉獄を脱して天堂に昇らんと説けるなり。法王が財政疲弊の救済策及び聖堂建立の爲めに、免罪符を公賣するに當て獨逸の一大部分に全權を委ねられしはマインツ及びマゲブルグのアルベルト大監督なりき、アルベルトは此事を委ねられ熱心周旋の勞を執りし事毫も怪むに足らず彼はドミニカン派の僧ジョン、テツツエルをして領内に於ける賣符の任に當らしめたり。テツツエル放逸不徳なれども辨才あり、參拜人の群集し來る折、勿體なげに法王の詔書を示し赤色の十字架を立て其前に大なる鐵製の賽錢箱を備へて滔々免罪符の功德を説き（黄金白銀の憂然として箱中に落つるとき、煉獄にある靈魂は方に飛で天堂に昇るべし）など陋劣なる言辭を弄して之を販賣せり。こゝに於てかれルーテル大に憤慨し宿憶忽ち破れ一五十七年十月三十一日ウヰテンベルヒに於て使節テツツエルに對し九十五條の討論題を掲ぐるに至るレオ十世財源の枯渴を恐れ再三使臣をしてルーテルの反省を促さしめし効なく一五十九年六月ライプチヒに於てドクトル、エックとの宗論の結果大に法王神權論を打破し、聖書敎權説を主

唱し、に於て教會の公敵となれり抑もルーテルの所論や要するに當時輿論の代表なり、故に氏が忌憚なく自信を表白せし勇氣は大に獨乙民衆の拍手を得たり。

一五二〇年十二月十日法王ルーテルを破門せしにルーテル屈せず、破門狀を公衆の面前に焼亡し法王と絶縁せり翌年ウオルムス會議により法護外の人となりしもサクソニヤ選帝侯の義氣に援護されワルトブルグ城裡に聖書翻譯に従事し一五四六年齡六十三を以てアイスレーベンに逝きぬ。

夫れ宗教改革は世界の近代史に現れたる絶大の事變なり然して彼れルーテルは改革運動の中心的人物なり。思ふにコロムバスが船頭に立ちて發したる「陸よ陸よ」と呼聲とルーテルがウオルムス議場に於て「我は神の言と明瞭なる道理によりて論破せられざる限りは良心に逆て何事をも示す能はず」と斷言したる此二事變は近代史劈頭の大事件なり、一步を進めてその中、何れを以て、尤も重大なる出來事と見做すべきかと云へば余は確かに宗教改革なりと云ふを躊躇せざるなり。是れ余が私言に非ずして四百有余年來の歴史の證明するところなり。當時又瑞西人ツウイングリ佛人カルビン現れ、獨逸ルーテルと共に三大宗教改革家といふ。次にこの改革運動の反動として、即ち舊教恢復運動起れり、この反動の一としてエスサートは天文十八年（一五四九）に於て我が國に傳る、これに就て考ふるにエスサート社祖ロヨラ十四歳にしてイスパニヤ國王の近習たりしも廟堂生活の軟弱を厭ひ、去りて寧ろ教徒として盡すところあらむと、其友サビエルと共に舊教を擁護せんとし羅馬教會に入り、献身的盡瘁せん事を誓ひ右教社を起せり。この爲せる社憲に曰く、社員は

清貧に安じ、品行を慎み長上に服従し、法王の命には絶對に服従を誓ひ、如何なる邊土と雖も辞す可からずかくてエスサート教社は教線擴張の爲に務めて大學教授となり或は國王諸侯の師傳となり、書を著し、主義を宣傳し、學校を立て、少年を教育し、以て全力を教會の爲に圖れり。然りと雖も宗教改革論起りてより新教漸く蔓延し、所謂舊教の教域大に蠶食され、爾も新教の根基固定し今更ら之と争ふも教勢恢復の困難なるを悟り、寧ろ新教の未だ着手せざる東洋及南米地方に布教するの利あるを見、こゝに始めて社員を派遣し海外布教に従事せしめたり、先づ東洋に於けるエスサート教社の創立はサビエルなり。氏始め印度ゴアに來りて教根を培ふや、我鹿兒島人到りて氏に面し、ゴアのエスサート學校に學びし後サビエルの通事として相伴ひて九州に來る、是れ即ち天文十八年なり同年八月島津、松浦、大村等の侯伯之に歸依し大に援護する所ありしにより、始めて薩摩平戸山口等に擴布せり。

當時信長一向一揆を抑壓する政策より之を保護し、安土の偉觀たる七重の天主閣を建て、京都に南蠻寺を起し大に彼等の弘教を扶けたため、一時教勢盛大となり、平假名聖書も又成るに至れりサビエル一五五一年十一月支那に渡らんとして其途次に歿せり、其後秀吉及び家康の起るや漸く基督教禁壓策を取り尋て東洋に於ける通商の競争者なる和蘭人により、この教社の主義の國家に危害あるを説かれたため徳川時代に到り大に禁壓策を取り基督教徒は迫害の悲運に陥る、爾く十七世紀以來禁壓愈盛となり天草の乱の結果、日本に於けるエスサート教會は其の跡を絶つに至れり。

上來畧して宗教改革と其の反動たるエスパータに就て記す。

六二

義仲と光秀

四乙 大鳥居 武彦

▲「入る日をも招き歸さん」淨海が權威 所領全土に及び三十餘州 一門要路に盛へて六十餘人 三百の禿童は京師の巷に充ち満ちて 長吏等しく眼をそばだつるのみ、

朝に錦を霞とし 夕に玉を砂とす 平相國清盛が榮華今や其の極に達しぬ

さあれ充つるは缺くる習 さしも豪奢の極みをつくし さしも暴威の限りを振ひし 平門一世の繁榮も

源三位頼政が宇治の一擧は 圖らず一葉の梧桐と散り 漸く天下の秋は至りぬ、

治承四年八月の末つ方 忽ち告ぐる東關の急 關八州の威望を負へる兵衛佐頼朝が 新銳の士氣を鼓舞して向ふ所 富士川の役戦はざるに先づ潰れ 敗報京洛の巷に聞ゆるや連りなり、

入道一門の興廢今よとばかり 切齒して力の限り下知すと雖も 敵は名に負ふ坂東武者 味方はみやびの貴公子なり 遂に回瀾を起倒にかへさん由もなく 今や一門の末路目睫に迫れる時 俄に信越の雲乱れ 俱梨伽羅峠の天險に 上方勢を一蹴したる 木曾の冠者が銳兵は 決河破竹の勢もて 鴉の海原おし渡し 壽永二年五月と云ふに 早や比叡の彼方には 八幡菩薩の白旗幾旒 のぼる旭の勢示しぬ、

▲室町幕府已に衰へ 王威悉く地に委するや 所在に起る諸豪群雄 勝を劒戟の間に決し 功を弓箭の巷に競ひ 彼れ一城を取る時は我れ一國を取り返す 昨日華臺玉樓の地 今日兵火の餘殃を受けて 寂寞雀羅を張るの地となり 朝に儀容嚴然三軍を叱咤するの將帥も 夕に馬革屍をつゝんで 鮮血徒らに春草を肥わしむ、

今や乱麻の如き六十余州 道もみ法もあらばこそ 下剋上は行はれ 肉身相食み骨肉相搏つ、

あはれ蒼生塗炭に苦しみ 日夜その堵に安んぜず 只々流離殘虐の哀に泣くのみ、

此の時信長現はれぬ、

銜枚に代ふる黒風白雨 而かも寡兵之れを冒して敵今川が本據を屠り 續いて甲の武田を亡ぼし 朝淺二氏を征服して またく中に海内一の弓取りと稱せられ 右府の榮位を授けらる、

實にや東海に潜む蛟龍 遂に雲を得て昇天せんや勇ましき、

鬼柴田勝家は北陸に蟠屈して遠く北強上杉に備へ 丹羽は四國に瀧川は北條に 將又羽柴秀吉は 遠く中國に兵を督す、右府信長が威望今や四海に普くして今夜本能寺の屯營には 譜代の功臣を従へて 豪賊遙に中國の爭覇を夢む、

初夏の宵時は三更に近づきぬ、星河は高く天にあり 桂の川は石にせゝらじく、肅々として歩武を進むる 丹波龜山三万の軍 胸に深謀を疊みて 靜に中軍を打たする光秀、突如聲あり 闇にひゞきぬ、

六三

「敵は本能寺にあり」と、

賽は已に投げられたり 銀鞭一過 三万の精兵は驀地急進 野越ぬ 山越ぬ 谷越ぬて 颯とばかりに京洛の地に寄せぬ、

曉夢を破る関の聲東雲の空に流る、枯梗の旗 續いて揚る紅燵の焰 思ひきや豪雄信長が武運の末 あはれ此の日につきんとは、

▲ 赤地錦の直垂に 緋緘の鎧きて 薄金の兜重げに 護田烏尾の矢幾筋 斜に箆にさしかけて黙々と馬を進むる冠者義仲後につゞくは四郎兼平、此所粟津ヶ原の老松は 颯々の比叡威に 颯颯の悲音を帯び、

頃は元暦元年正月廿日の暮ッ方 峯の白雪消ぬやらで 街道北に歩み行く 駒の足掻も寒げなり。

あはれ平家を西に逐ひ 旭の勢すさまじく 洛のうちとを切り靡かせ 禁闕さへも驚かせし 旭將軍義仲の 武運も今や盡きぬと思し 宇治の戦先づ敗れ 九郎判官義經か 手づから下知する關東勢 息をもつがや攻め寄せて さしも越路の五万の軍 遂に敢なく敗れ果て 昨の將軍 今の落人 實にや樺花一朝の榮にこそ、

孤影蕭然 路を辿れば 遙に聞ゆる関の聲 續いで起る軍馬の音 早や追手の兵は近付きぬ 義仲最期の時は來ぬ、

朔風愈々寒くして松籟愈々悲音あり、

あな哀れ 朝日將軍義仲が末路 枯骨聲なし偉圖亦亡ぶ 粟津の晴嵐 永なへに英雄を吊ふにや、

▲ 天正十年六月二日の朝まだき 突如兵を率ゐて 本能寺の伽藍を焼き 右府信長が素首に 怨みの及酬ひたる 惟任日向光秀は多年の積怨こゝにはれ 身は惟任將軍の名も高く 威名一時に京師の天を 蔽ひしが 素より無名の戦なり 天王山の一戦に 味方の軍敗れてより 日に／＼傾く武運の末 今伏見へど夕風に 心淋しく落ちて行く、

後に續くは數騎のみ 過度の奔命に疲弊して 人や馬 馬や人 共に首を俛れつ、 茂る尾花をかき分けて 小栗栖の里にさしかゝる、

初夏の日已に暮れ果て、 銀月幽かに山の端にあり あゝ三萬の兵を督して 都の方に攻め入りし時も夏の夜半なりき 今や敗軍の將として 進まぬ馬に鞭くれつ 三萬ならぬ數騎の武者と 共に落つるも夏の夜半 颯たり爽たる昨の英姿も 今は蹣跚たる死影を見るのみ そよ尾花の風にさへ蹣跚として胸さわぐ 名もなき土民の手にかゝり 敢なく尾花を血に染めし 惟任日向の最後や哀れ、

肥馬一鞭 遠く京都を望みし時 かゝる武運のきわみとは 露夢にだも思はざりけんを、 (了)

林中の煙

四乙 藤本弘治郎

六六

凜々たる寒風は破窓より襲ひ來りて眠るあたはざるより、床を放れ欄干の端へ出で見るに、こは如何に昨宵のまに降りし白砂の雪は高う積りて四方の山山黄金の衣帛をつけたるが如く、骨計りになれる枯木も美しく花の咲き満ちたるが如し。

林の内より遙に見え渡る小坂の藁屋は恰も銀殿玉樓の如く、その中より朝餉炊く煙の濛々と立ち登る、詩趣豊かなり。

庭にはかつて手植せし若竹の雪の重みに堪へ兼ねて垂れたるさまいとも可笑し。

吠えしきる犬聲コツケツコーと鳴く鶏、形容の辞なきに苦しみぬ。斯く美しき景色を恍惚たりし余は下婢の朝飯食へよとの聲に吃驚して急いで食を了へて再び山河の雪景に眺め入りぬ。

昨日の夕暮明日獵遊せんと言ひし、曙光、碧水、孺々、景翠、秋煙の五君小倉洋服の輕装して、勇ましく背には二連銃やレミントン銃など斜に擔ひて行きぬ。余は五君との約も忘れて雪景に心を奪はれしかば急いで裝整へて扉を押し開きて飛び出しぬ。友の或者より藤花君の朝寢坊との一言有難からずとも頂戴した。

降り積りたる雪は歩むごとに妙なる響を傳へ何んとなくお可しく思ひ進み行くに、東天紅をおびて赫々たる銅盤の如き太陽青空に現はれたり。

昨宵より降り積りたる雪は、さても卑怯なる者哉、赫々たる靈光を見るや。溶け消へて、一層足は冷たくなりぬ。實にまよならぬは浮世かなとは誰が言ひ初めしぞや、昨日迄は榮華の夢に誇りし者も哀れ無情の風の

襲ひ來るを見れば悲慘の體となり果つるなり、嗚呼、雪もさるものにや、太陽のあらはれざる間は風流雅士に詩に吟せられ歌に詠まれつゝ賞翫せられしも一度その熱にあへば空しく怨みの言葉もなく消え行くこそ哀れにもおかしき次第ならずや。互に相語りつつ半里程行きていよいよ山にさしかかりぬ。

兩輪も摩するが如き狭谷にそひて深谷に入れば藁々として繁茂せる林中に入りぬ。太陽の光も容易に漏れ難くして其處此處に雪の積れるを見る。

水の如き冷風は颯々とし身にしみて氣味悪しく鳥聲を聞かんと思へども寂閑として音なし、唯折々雪の梢よりポト／＼と落ち來りて衣を濕すのみ、あな嬉しや眼を放てば白兎の木樹のもとに楽しく遊べるを見る、余は友にも告げて高名語りをせんものと彈丸込め定的を定めて一發ズドン、銃口をはなれたる彈丸は山間の寂寥を破りて空を飛び、兎は紅潮を流して斃れたり。碧水君、萬歳、萬歳と叫びて獲物を取り來る、是に於て一行は元氣を復せり。

溪谷益々深うして森嵐嘯び鳥聲啾々として意氣益々剛壯なり。彈丸込めて靜かに進む。余は松の枯枝に鳩のとまれるを見るや、ねらひを定めて發砲す、哀れにも數なき命を余の爲に取られたり。進み／＼て大野原に出でしが、何もよき獲物なく絶望、失望して他路に向ひぬ、時にポケットより時計を取り出して見れば十二時なれば、外套の中より辨當を取り出して食はんとすれども冷えて食ふ可くもあらざれば、日本男子が何云ふかと豪傑振りして食ひし事の滑稽さ、秋煙君ニギリメシを打ち捨て急いで曰く。むかうの木陰に見ゆるは何物かと聞くより早く孺々君ポケットより双眼鏡取り出して驗するに兎なり、此方に來る様なり。皆一同は彈丸打ち込め天の興と喜びて木影に伏して待ちをりぬ。眼前十間餘の所に來るや、血氣に早やる曙光、い

ま暫しと止むるも聞かで發彈せしかば、兎はやくも木蔭に逃げ入らんとす。景翠君やはか逃すべきと一發ズドンと打ち放てばよく急所を射て遂に獲ぬ、景翠君の心情思ふべし。

四方を見渡せば小鳥の聲かまびすしく、此處其處と飛移せるを見て、急いで一行二手に分れて、余は碧水君秋煙君と共に西方に趣きぬ。其處此處と見渡せば鳩鵲野雀等の木梢にかまびすしく縦囀せり。依つて無情にも容赦なく彈丸を打ち續けて忽ちに鳥囊の重みを加へぬ。興に興を加ふるに従ひ仙境に彷徨するが如くその疾勞せしも覺えず進みぬ。

時に夕陽西山に沒せんとす、闊歩して舊處に歸りぬ、勇氣滿々意氣揚々たり、休息すること暫時にして歸途につきぬ。

暮色凄寥として怪雲滿天將に雪降らんとす。

地獄の如き谷路を蹈みて溪谷に下りぬ、時に雪霏々として散り初めぬ。我等急いで我家の寒燈目差して小走りに走りぬ。寒かつたの言葉を只今歸りましたの代りに幾度かくくりかへしぬ。

莞爾と笑むは兩親、得物の多少を云ひ鳥の大小を云ふは弟妹なりき。

嗚呼おもしろかりしよ今日の狩、勇ましかりしよ今日の獵。

曇りの日に

四甲 小川 桂 瑞

本讀むで居たが胸がむか／＼する頭が馬鹿に重い、じん／＼する。こんな時は郊外にとひとり合點して辭書

を本箱に投げ込み、ぶらり裏から抜け芹川堤へと急いだ、何となく胸が透いて氣がぼつとする、昨日の寒の名残か太陽は何處へやら空は一帯灰汁の水つた様微かな陰濕の北風が稻の切株や二三寸に延びた瘦せびれた草を傳うて裾にじやれる首がいつしか縮む、一句もがなと堤を辿りながら四顧する、左手なる笹垣の上に並ぶは所謂土族屋敷である、其の向ふは市街になつてゐる。間々に參差たる榎の太木が天に沖して其の邊から劈／＼様な白舌鳥の聲がする、車井戸の軋りが空に聞ふ。右手には池を超えて一段低く緑の畑を背景に、農家が五六軒、遠く南に赤土を處々に露出する荒神山をも見受けられる。眼を後方に轉すれば小口、山中雨製糸場の煙突數本が城山の少し西に高く聳ね、何となく發衰の風情……カラコロと下駄音訝ゆる冬の月夜にでも見ると、金星瞬々紫紺の冠の様な空に屹立する四本五本の煙突が、丁度羅馬邊の夜景を彷彿と畫いてる様なのに……煙さへ見ぬ。枯寂！哀愁！陰濕！に充ち満ちた其處ら一面の氣に自分は又胸の苦しさを覺ゆる……細い／＼人も通るに猶危い様な一本橋を越す、一望稻の切株の田野は前方に展げられ、兩側は數で其の周圍の畔等には枯々の楓が列をなしてゐる……總べてこの邊は皆楓だ低い田の間の高地は畑で燦の中周圍には楓の羅列してゐない所はない従つてこの野の美は秋に多い、そして木の頂には四時の小鳥の囀樂を奏してゐる……菓子箱の中の様な畑は、遙かに人影を認め得る芹川堤防にしきられ、瘴惡な空はその向ふの森の杉堤に落ちてゐる。小さな枯柳の添ふてゐる小溝の淵を地に匂ふ小草を踏んで行く、水は涸れてゴロ石等に白い鳥の糞が見ゆる、畑は漸く覆はれた藁を抜き出た麥の新緑で、細長い其の葉は微風にも尚なよ／＼と揺られてゐる、次は菜畑、それを過ぐると毒々しい暗色な堀いやな臭が鼻を刺す、堀を周ると右手の籾は切れる、村里の家屋が遙に見ゆる、足は無意識に遅々としてはかざらぬ、道は左手の籾下を行く。四邊は空の様

に陰鬱だ、氣味の悪い程沈靜だ、前方に百性らしいのがただ一人見ゆるばかり、百性も冬籠と見ゆる、右の高地に墓所がある、楓樹には鳥一羽居ない、薄黒い旗一流、地下の亡靈でも迷うて居るかの様、うなだれてゐる空は不相變だが少し薄溫みを帯びて一層陰鬱を増した最前からの胸の苦痛が今は頭まで連絡して、自分も陰鬱の虜になつた様だ。ふと見ると葉先の茶けて重なり合つた簾が、今にも自分を包み吞うと、だん／＼上方から小さな搖ぎもしないで迫つて来る、音も立てない、自分は止つて凝視した、が何でもない、全身の鼓動は餘程鈍れて、總てがものうく、頭ばかり器械的に動くのが意識される、自分はそのまま目を閉ぢた、こ——シ——と一面に充ちた、聲でもない、宇宙の囁き？音でもない、極く／＼ささやかな不透明な、自然の聲だらう？目を開いても……悶へに苦む様を鶏聲が簾の後から起つた、少女の叫びと聞ゆる、自分に歩を進む。簾は盡きた、四隣はすかり開けた、灰色の空は何處迄も幼稚な緑の麥を掩うて居る。伊吹の山が正北に眞白の冠を戴いて居るのが髣髴としてゐる、風はない、陰鬱だ！瞬間宇宙の靜止！と思ひ及んだ時自分は云ひ知れぬ不安の念と、恐怖の感とに思はず戰慄した、そして自分ばかりが最後の運命の手に弄ばれて居るのではないか？……と思ふともう頭は混乱に混乱を重ねて、胸がいよ／＼變になる、不安の念は四周から襲ふ、自分は早や居たまらなくなつて足は無意識に家の方に向つた。(丁)

異郷の友に

四乙 大鳥居武彦

A 君——

お別れしてから早や一月になりました、

冬枯れの時期は漸く過ぎて 鈴鹿の山は 淡紫に彩られて行きます、水田の水もとけました、人は皆な新しい元氣と 自覺と 生の躍動とに 高鳴る 血潮の盈滿を 覺ながら 勇ましく其の日其の日の生活を奮闘てふ インクを以て 染めて行きます、

然し私は 此の熱鬧の騒音を前にして 獨り靜かに淡い思ひ出に耽ります、

あゝ君 街へ街へ 熱鬧の地へとは多く出て行きます、然し私は 相變らず 淋しい自然の懷に抱かれて 深い 樂しくて而かも悲しい夢の様な 幻の様な 追憶の影——君——なつかしい君の思ひ出——に憧憬れて 獨りひそかに 熱い涙をしぼつて居ります、

年の暮れ—— 樂しいクリスマスの前の晩 君は京へ行つてしまつた、心行くまで青春の行樂に 酔うて居た私の心は 同情もなく 涙もなしに 親しい君を異郷の京へ連れ去つた 殘酷な運命の神のさばきを目に見ては 神を呪はずには居られなかつた 私は全く失望した、秋は痛烈に孤獨の煩悶を味つた、失望し煩悶する私の心は 遂に人を呪ひ世を ひ 神を呪ひ佛を呪ひ 果ては社會の總てを呪つた、

忘れもしない 十二月二十四日の晩だつた、君が病軀を汽車に托して 遠く京の方に旅立つたのは「御大事に……」失敬……「此れは私が君と交した最後の言葉であつたのだ 其の時君の眸はうるんで居た

あゝ 尊い此の涙美しい友情の結晶 私はあれから家へ歸つて机の上にうつぶしゑまゝ何時迄も何時迄も別離の悲哀に泣いて居た 其の頃君は冷たい車窓に身を寄せてザーツと去り行く故郷の山川を眺めたらう 故郷の山川を眺めた君はきつと私を思ひ出して呉れたらう、

あゝ君 浮世を知らぬ純真な私の情緒に生れて始めて悲哀でふ烙印をおし付けたのは實に君との別れたつた私は悲しい 私は實際悲しいのだ

煩瑣な理論の合致と云ふより純なる情緒の融合と云ふ方がより多く適當と思はれる程君と私は感情的に親しかつた 勿論理論の合致もあるだらう 理性の満足もあるだらう 然し理論よりも理性よりも君と私を親友と云ふ一點に結びつける強いチェーンは實にお互ひの美しい情緒であつたのだ、

君も私も感情に生きる人間だ 君が虹霓の空の静けさを欽仰する時私も其れに共鳴した 私が雷雨の殺伐に熱狂する時君も其れを肯定した 若葉が萌ゆれば若葉の陰に櫻が咲けば櫻の下に君と私は心行く迄歡樂の杯に酔うたのだ 月が冴ゆれば月の影に紅葉が映ゆれば紅葉に向ひ君と私は心行く迄悲哀の涙に咽んだのだ あゝ其の君が最早此所には居ないのだ どうして此れが私は泣かずに居られよう 私は――あゝ私は毎時黒孤鸞の哀愁に泣いて居るのだ 八月の始め頃月のよく冴れた晩だつた 君と私は濱に出た 其の時波は少しもなかつた 薄もい水の面を青白い月が靜に照らして居た 君と私は衣物を脱いでその魔の様な靜かな水の中へ――と入つて行つた 二人は泳いだ――無言のまゝで……

死の様に靜かな水の只中をスーッ／＼と沖の方へ出て行つた 其の時あゝ其の時私は實際嬉しかつた 黒い水面にボツリと浮ぶ二人の顔 月はデーツと照らして居る 私は小聲に歌を歌つた 君は詩吟をやつて居た 靜かな水面をふるふ様にして傳つて行く私の歌と君の詩！ 私も君も無言の中に固く友情を誓つたのだ

君と私は二學期に入つて愈々親密になつて來た 君は私をよく知つて居た私も君をよく知つてゐた 或る時は私は感情の發作に興奮し切つた君を見た 其の時私は只無言で君を見詰むるのが常だつた 何故ならば

君も私も熱烈火の様な感情を持つて居た そうして其の感情の前にあつては如何なる物も其の存在の安定を保證せしめらるる事が出来なかつたから

その君が今は居らない 私の望み私の悦び將又私の唯一の親友だつたその君は今京へ行つてしまつた 私は限りなく悲哀と寂寞の感に打たれる あゝ進むものは別れなければならぬとは言へ私は君に別れて悲しい 君にお別れしてから私も毎日學校に通つて居る 然し私はちつとも面白く思へない 面白くもなく學校へ毎日行つて面白くもなく時を過す あゝ君 私の今の生活は全く空虚だ全く無一物無意義であるのだ 君の京へ去つた翌々日私は堪へ難い憂愁と寂寞の思に驅られつゝ獨り漂浪の旅に上つた ズック／＼とぶら下げて脚絆草鞋に北國路を北へ北へと辿つて行く私の姿 伊吹の峯の白雲をサツと銀色に照り映わしめた朝日の光りは淋しい獨り旅の私の影をボツ／＼と地に落した

霜柱をふみしだいて私はズン／＼北へ歩んだ 淡紫の陽炎が蕪青畑からめら／＼と立ち上る かうした淋しい獨り旅を私は毎日々々續けて行つた

二日目の眞晝頃私は鞆轆と打ち寄する波の音に全身の脈管を緊張させつゝ若狭のさある漁村の濱邊に立つて居た 磯の老松は不斷の琴を弾して居る 潮風がサ／＼と私の頬を撫でる 私は故里遠く離れた此所若狭の國のさある海邊に胸の痛く思はれる程深く／＼淋しい旅情を味うたのだ 足にまかせて野道山道海際を獨りトボ／＼歩いて行く時私は始終淋しかつた

道けはしく 行く手遠し 心ざす方に 何時か着くらむ

こんな讚美歌を歌つて行く時私は泣き度い様に思つた事が幾度かあつた 若し夫れ獨り火桶を抱き乍ら